

第637回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2021年10月度 ——

◇ 開催日

2021年10月18日(月)

◇ 議題

<テレビ番組>

民放連盟賞テレビ報道番組部門出品作品

「ワクチンの行方～” コロナ禍” 収束への道筋～」

放送日時：5月28日午前10時10分～（60分）

◇ その他

「2021年度上期の番組種別の公表報告」

今回は「新型コロナウイルス」感染防止（三密回避）の観点から、十分にソーシャル・ディスタンスを確保するため通常より広い会議室にて開催した。

九州朝日放送株式会社

第637回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2021年10月18日(月)午後3時25分～4時40分
2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室
今回は「新型コロナウイルス」感染防止（三密回避）の観点から、十分にソーシャル・ディスタンスを確保するため通常より広い会議室にて開催した。

3. 委員の出席

委員総数 8名
出席委員数 8名

委員長	赤木由美
副委員長	石橋和幸
委員	中山裕二
委員	石井靖子
委員	藤村まこと
委員	丸石伸一
委員	田川真司
委員	上野恵梨奈

欠席委員数 0名

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和氣靖
執行役員	岩村智
報道情報局長	柴田高宏
総合編成局長	大保一
報道情報局 報道情報センター チーフプロデューサー	野村友弘
報道情報局 報道情報センター プロデューサー	吉住啓一
報道情報局 報道情報センター ディレクター	国武雄太
報道情報局 報道情報センター ディレクター	上部智美
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	園田哲也
番組審議会事務局（視聴者・広報室）	松永俊郎

4. 議題

- (1) テレビ番組 民放連盟賞テレビ報道番組部門出品作品
「ワクチンの行方～” コロナ禍” 収束への道筋～」
放送日時：5月28日午前10時10分～（60分）
- (2) 2021年度上期の番組種別の公表報告
- (3) 10月・11月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (4) 9月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (5) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- 新型コロナウイルスのワクチンを巡り、治験の現場や自治体で何が起きていたのか、長期間の丁寧な取材で非常に分かりやすくまとめていた。時間軸に沿い克明に記録した内容が視聴者に臨場感を与えていた。関係者の使命感や緊張感がひしひしと伝わった。
- ワクチンの治験が地元福岡の医療施設で実施されていたことに驚いたし、その模様をKBCが先駆けて取材していたことにも驚いた。並行して紹介された苅田町におけるワクチン接種の準備の様子は、コロナ収束との観点から番組の内容に厚みをもたらした。
- ワクチンの治験になじみがなく、被験者に密着し抱える不安や動機を聞くことができた点は良かった。通常は知り得ない治験の詳細や承認までのステップを分かりやすく解説しており、マスメディアとして視聴者に正しい情報を伝える役割に徹した番組だった。
- 自治体の職員や医療従事者など、ワクチン接種を裏方で支える人たちにスポットを当て、長期間に及ぶ密着取材を経て完成した本作は見応えがあった。ワクチン接種が始まったばかりの5月という時期にタイムリーに放送できたことも素晴らしいと感じた。
- ワクチンがいつ到着するのか分からない中で、到着を前提に何度も接種のシミュレーションをして課題を探し出す自治体の職員の姿がよく描かれていた。大変だろうが明るく対応する様子や素晴らしいコメントが長期間の取材でよく撮影されていた。
- 限られた時間の中で、あまり物語を作り込まずに誠実にドキュメンタリーを制作することは、とても意味があることだと感じた。
- 単に国の対応への批判をつづるのではなく、ワクチン接種や治験に関わる様々な人の視点から、その思いや苦労、苦悩を「生の声」として伝えていた点が良かった。
- 番組が放送された5月は感染者が急増し、先行きが見えない不安な状況だった。少し落ち着いた今ならいくぶんか穏やかな気持ちで番組を見ることができる。同じ番組でも、見るタイミングで印象が変わることに改めて気づかされた。
- 現在は経口薬の開発も進んでいる。ワクチンの国内生産や供給体制が整備され、途上国などへも行き渡るように国と市民を巻き込んだ議論とすべく問題提起を続けて欲しい。

などの評価を頂きました。

また、気になる点や望むこととして、

- 盛り込まれた情報やデータが多い分、構成面でややまとまりに欠け、伝えたいメッセージの埋没感があった。「ワクチンの行方」というタイトルと内容にずれを感じた。
- 「欧米はワクチンを危機管理の道具と考え、日本はそれを健康管理の道具と考えている。」とのコメントは日本の危機管理の脆弱さを物語っていたが、なぜそうなったのかをもっと深掘りして欲しかった。
- 国が招いた混乱の端緒を一つでも解き明かすことができたなら、「どうして日本ではワクチンを巡る混乱が続いたのか？」という視聴者の疑問にもう少し答えることができたのではないか。
- どうやってワクチン治験の被験者に選ばれるのか、全国でどれくらいが被験者になったのか、被験者の年齢や性別の内訳はどうなのか、もう少し具体的な説明が欲しかった。
- 本物のワクチンと偽薬を用意して治験をすとの説明だったが、何のためにそうするのか分かりにくかった。治験後の副作用や後遺症への補償はどうなるのか気になった。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- ワクチンの治験の現場への取材はKBCが最初に成功した。情報を得た時点では「まさか、信じられない」という思いでいたが、実際に足を運ぶと治験の真ただ中だった。2020年12月の時点で撮影に成功した貴重な映像であり、初めて治験にスポットを当てることができた意義あるドキュメンタリーだと自負している。
- 全国的に関心が高い治験の様子は「アサデス。KBC」で取り上げた当初から反響が著しかった。治験で大変な現場に問い合わせ等が殺到することは避けなければならない、全国放送での紹介は断念した。
- テレビドキュメンタリーは（フィルムと異なり）タイミングによって見え方に違いが生じる。社会の情勢を的確にリアルタイムでお届けできる「速報性」がメリットだ。視聴者が一番知りたい情報をぎりぎりまで詰め込み（先に決まっていた）5月の放送に至った。
- 本作は「アサデス。KBC」のコーナーから派生したもの。「ワクチンの行方」を視聴者とともに探るべく、去年末からコーナーを立ち上げた。そうしたコーナーをドキュメンタリー化した結果、タイトルと内容にずれや乖離が生じた。
- 2021年1月時点で県内の自治体に対し接種計画についてのアンケートを実施したところ、大半の自治体が「まだ、何も決まっていない」とのことだった。「何も決まっていないことをテレビで紹介するのは不安」とのことだった。一方、荻田町は「職員の頑張る様子を撮影してくれるなら」と快諾いただき、取材に挑ませていただいた。
- 本作は「ワクチンの行方～実録 緊迫の治験最前線～」というタイトルで6月に、住民への接種を進める荻田町への継続取材を盛り込んだ「ワクチンの行方2～丸投げされた接種計画～」を8月に、それぞれ30分のテレメンタリーで放送した。

などの説明をしました。